

第 23 号 わずか 4 グループの連合体が、2 か月間で 16 グループに！

～ 銀行業をはじめたい！団体登録までの道のり～

(2006 年 7 月 31 日発行)

VVK 加盟グループが 4 つからスタートした新規グループのリクルート。7 月末には、毎月の新グループのリクルートの成果があり、16 グループになった VVK。団体登録の方は、しっかり書類も揃え、ビシャカパトナム県の組合登録事務所に出かけていったオバチャンたち、をお伝えするのが今日のご報告。

VVK は、2005 年 3 月にアンドラ・プラデッシュ州ビシャカパトナム市で、発足したスラムのオバチャンによる SHG の連合体。発足前から、2004 年 7 月の PCUR - LINK 事業開始以降、ソムニードが実施する様々な研修を通じて、まずは個別の SHG のマネジメント技術を習得し、事業開始から 2 年間で、個々の SHG 内での資金運用能力を飛躍的に向上させた。

わずか月 30 ルピーほどの貯蓄しか資本のなかつた彼女たちが、外部の銀行等からの融資に頼ることなくグループ内での「借りる、返す」を繰り返し、帳簿をきちんとつけた結果、グループのキャッシュフローが向上したのだった。

VVK に加盟していない SHG、もしくは VVK に加盟している 2 年前のオバチャンたちの SHG の様子は次の通り。。。

銀行や、地元政府が年に 1 度や 2 度、政治家のキャンペーンに合わせて、ローンを SHG に貸し付けてくれるのを、口を開けて待っているだけ。欲しいときにお金はもらえないが、何も貰えないよりは、マシ、貰えるものは貰っておこう、くらいの気持ちで、SHG 内だけの資金運用なんて無理だっと思っていた(いる)。

銀行による数々の嫌がらせ。。

10,000 ルピーの SHG の貯蓄を銀行に預けておく、という条件で、50,000 ルピーを貸し付けたり、銀行が SHG へ支払う利子の金額を公開しなかったり、年度末になっても、SHG の貯蓄に対する利子を支払わなかったり、SHG が融資を受ける際は必ず、1 週間毎日のように、SHG 代表メンバーが銀行に呼び出されたり。。。

SHG のオバチャンたちに一番身近で、一番親切なのは地元の高利貸し(いつでも喜んで貸してくれる)。しかし、親切なのは借りるときだけで、高利子のその取り立ては厳しい。

SHG を利用した、政府未承認のノンフォーマル銀行が大流行したアンドラ・プラデッシュ州。

即座に 5,000 ルピーを貸してくれるが、5 回か 10 回の返済で返せない場合は、家財道具まで持って行かれ、借金苦に自殺する女性が急増。高利貸しと違うところは、個人でなく SHG に貸し付けたという点で、VVK オバチャンたちも何人か手を出してしまう。

(しかし、近隣のスラムで自殺者が出たとたん VVK 内で情報を共有し、SHG 内でローンを組んで、すぐにノンフォーマル銀行に返済する、という迅速な対応を取った。)

アンドラ州政府が推進するスキームで、SHG やその連合体 MACS (相互扶助組合組織) に団体登録しなければ、道路も学校も家の新築も補助金がもらえない、と脅かされる。

実際は、SHG を作って、また複数の SHG の連合体で団体登録 (MACS) に登録してはみても、帳簿のこともローンのことも誰も教えてくれない。また政府が推進するスキームで、SHG を作ったら、家の新築のための補助金がありしたが、補助金の 3 分の 1 は、キックバックとして地元の役人のポケットへ。。。月に一度、どこからか政府の委託を受けたという NGO のスタッフが SHG にやって来て、お金を集め、勝手にグループの帳簿をつけて帰ってゆく。この NGO スタッフに、50 ルピーを毎月サービス料として SHG から払っているけど、ローンがいつ貰えるのかも、SHG や連合体に入っていて、ナンのが得があるのかも、誰からも教えてはもらえない。。。

こんな現状を打開した VVK のオバチャンたちは、今でもなんだかんだと日銭に困ってはいるけど、PCUR - LINK 事業の数々の研修の成果で、自分のグループ内のキャッシュフローがよくなり、年に何度も自分の SHG からお金を借りられるようになったオバチャンたち。

次なる課題は、自分たちの銀行！

複数の SHG が集まって銀行を設立すれば、個別の SHG だけでは扱えない金額が、自分たちの手で管理できるようになる。

そこで、あれこれみんなで調べた結果、複数のグループによる SHG の連合体で銀行業を行うには、アンドラ州政府の場合、政府へ団体登録をしなければならない、ことがわかった。

それが MACS 「相互扶助組合組織法」で、VVK は、MACS 「相互扶助組合組織法」に登録すべく、活動を開始した。膨大な団体登録に必要な膨大な書類を抱えて、(とにかく英語 & テルグ語両方で、膨大な量の申請書！) ビジャカパトナム県の組合登録事務所に出かけて行った。

登録事務所スタッフ：「VVK というのはいつから活動してるの？」

VVK 代表 ビジャラクシュミ：「2005 年の 3 月からです！最初 7 つの SHG で発足して、その後、色々あって 4 つの SHG だけになってしまったけど、5 月、6 月で SHG の数がどんどん増え、7 月末には 16 の SHG が加盟しています！いよいよ自分たちで銀行業をはじめたいので、団体登録に来ました！」

登録事務所スタッフ：「あんたたち、VVK の会則はあるの？」

ビジャラクシュミ：「ハイ、この小冊子を見てください！VVK メンバーは全員、この会則の小冊子を持っています！なんと言ったら、11 か月もかけて、自分たちで会則を作ったのですから、代表メンバーの全員が会則を理解してますよ！4 月には会員総会も開いたのですよ！」

登録事務所スタッフ:「すごいねえ。もう会員総会も開いて、会則の小冊子まであるのかい?とこ
ろで、団体登録用の申請書類を見せてくれるかな?」

ビジャラクシュミ:「どうぞ。」(ドサッと膨大な申請書類を差し出す)

登録事務所スタッフ:書類をパラパラと見て。。。「すごいねえ、全然、書類に不備がないねえ」

(後でビジャラクシュミから報告を受けたソムニードスタッフ心の声):そーだろう、そーだろう!

JICAへの提出書類で鍛えられているソムニード・スタッフも、VVKのオバチャンと一緒に作った書
類だもんね、エヘン。

ビジャラクシュミ:「じゃあ、団体登録の申請書を受け付けてくれますか?」

登録事務所スタッフ:「でもねえ、君たち政府のスキーム(プログラム)の下で、設立されたSHG
連合体でないのだろう?ちょっとねえ、君たちの活動を認めるのはねえ。。。」

ビジャラクシュミ:「そんなー、書類は全部整っているのでしょうか?」

登録事務所スタッフ:「そうだ、ピシャカパトナム市都市計画部の人から推薦状もらって来なさい
よ。そうしたら登録を認めてあげるからさ。」

ビジャラクシュミ:「……………」

その日は、VVK事務所に戻る。

政府の推薦状がなければ団体登録できないとは、何処にもMACS「相互扶助組合組織法」
には、書かれていない。登録事務所のスタッフは、登録を申請してきた団体の能力を査定し、登録
するか、しないか決定するのが仕事なのに。

アーンドラ・ブラデシュ州のSHG多くが、MACS「相互扶助組合組織法」に登録されているが、
その多くが政府から雇われているNGOスタッフが会則を作成し、SHGメンバーの誰も、会則の中
身も知らず、ただ言われた通りにSHGの代表が署名して、団体登録しているケースが大多数。登
録事務所に団体登録の申請に行くときもNGOスタッフは同行し、担当官の質問に答えるのは、N
GOスタッフで、オバチャンたちは「団体登録の意味」も把握していない場合がほとんど。

また政府のスキーム(プログラム)でもなく、NGOのスタッフも付き添わず、自分たちだけで登録
事務所に申請書を持って来るスラムのオバチャンなんて、今まで誰もいなかった様子。

しかも、登録事務所の担当官の質問にすべて堂々と答えることができるオバチャンたちなんて皆
無だった様子だ!

VVK事務所に戻ってきたビジャラクシュミVVK代表は、他の3名の代表メンバーと相談し、ピ
シャカパトナム市都市計画部にも出かけるが。。

ビジャラクシュミ他VVK代表メンバー:「あの一登録事務所からここで推薦状をもらってくるよう
に言われてきたのですが、私たちVVKが団体登録するための推薦状を書いてくれないでしょ
うか?」

ピシャカパトナム市都市計画部:「何で、ボクがアンタの団体を承認しなくちゃいけないわけ?な
んかキックバックあるわけ?(間接的に)団体登録に、ウチらや、市役所の推薦状なんて、必要
ないんだよ。直接、登録事務所に行けばいいじゃないか?」

ビジャラクシュミ他VVK代表メンバー：「アタシたちも推薦状が必要だとどこにも法律に書いてないから、直接、登録事務所に行ったのですよ。そしたら、ここで推薦状貰ってこい、登録事務所の人に言われて。。。」

ビジャカパトナム市都市計画部：「なんだかんだと登録事務所のやつ、自分たちだけでSHGの連合体を査定して、問題があったときに嫌だからって、俺たちを巻き込もうとするんだ。いいかい、必要ないんだよ、推薦状なんて。さあ忙しいのだから、帰って、帰って。」

そこで、ビジャラクシュミ、また登録事務所に出かけて、都市計画部で推薦状が貰えなかったことを報告。

ビジャラクシュミ：「都市計画部では、団体登録に政府機関からの推薦状なんて要らないって言われたんです。今日も申請書類を持ってきましたから、書類を受け取ってくれないでしょうか？」

登録事務所スタッフ：「まあそれはそうなんだけどさ。ほら、ナンかアンタたちのバックにNGOとかいないの？そのNGOの人を登録事務所に来るように言ってよ。」

ビジャラクシュミ：「どうしてですか？」

登録事務所スタッフ：「だって、そのNGOがアンタたちのVVKへの支援を止めたら、アンタたちの活動が終わり、なんてことになったら、登録を許可するボクの責任になってしまうのよ。そのNGOから“VVKは、ずっとワタシのNGOが支援します”みたいに一筆書いてもらえないの？」

ビジャラクシュミ：「ソムニードの人たちは、言えば来てくれます。でも、資金の支援は最初から2007年6月末のICAの事業終了時まで、だって言われています。そのつもりで、私たち今、新しいSHGをVVKのメンバーにしよう、と頑張っているのです。他所からの支援に頼ってしか活動を続けられない状態は嫌だから、自分たちのVVKで銀行をやりたいんです！だから、申請書類を受け付けてください！」

登録事務所スタッフ：「アンタたちさあ、政府のスキームの下で団体登録しないと、道路とか学校建設とか、家の補助金とか出ないよ。どーするの？だからさ、政府が推進するSHGに入っさ、それから連合体作って、団体登録したら？こんな風に自分たちだけで直接、登録しに来ないでさ。」

ビジャラクシュミ：「アタシたち、道路とか学校建設とか、家の補助金とかそういうことは今はいいのです！今は、自分たちの銀行、VVK銀行を設立したいのです！だから、団体登録が必要なのです。どうか団体登録の申請書類を受け付けてください！VVKが信用ならない、というなら、いつでもVVK事務所にきて、金銭出納帳でも銀行通帳でも、仕分帳でも、2005年度の年次報告書類でも何でも見てください」

登録事務所スタッフ：「まあまあ、ボクも同僚と相談してみるから、また来週来てください。」

そもそもNGOがずっと支援することが条件で、MACS「相互扶助組合組織法」法に登録するな

んで、どこにも法律に書かれていないし、そういう趣旨で法律があるのでは決してないはずなのに。。。

登録事務所スタッフが心配しているのは、これまでアンドラ州政府のスキームの下に、マッシュルームのように次々と連合体が結成され、その団体登録を認可してきたのが、その団体の多くが、政府のスキームでの支援が終わると同時に活動を停止しているという事実が山積みだから、だ。

ひどいところでは、団体登録時に、保険料や会費だ、月別貯蓄だと、お金を回収してきたNGOのスタッフが、政府からの委託金がNGOに支払われなくなった途端、そのお金を持って逃げてしまったとうケースも有り。

また、保険料を払ったにもかかわらず、SHGメンバーが亡くなくてもまだ政府のスキームで登録された団体に所属するSHGのオバチャンの家族に、保険料が支払われたという話はどこからも聞かない。

これだけの帳簿や報告書類をSHGのオバチャンたちが自分たちだけで作成し、その維持管理をしているSHG連合体なんてビシャカパトナムにはどこにもないし、州全体でも一体どれだけあるか。。。

また別の日の登録事務所。。。

ビジャラクシュミ:「また来ました！今日は、申請書を受け取ってくださいか？」

登録事務所スタッフ:「アンタたちもしつこいねえ。まあ書類だけは受け取るよ。これは、ボクは君たちの団体登録を無視しているわけじゃない、ってことだからね。でも申請書類を受け取るイコール登録をする、ということじゃないからね。ずっとこの申請書類がボクの机の上にとったまま、ということもあるんだからね。」

ビジャラクシュミ:「……」

まずは申請書と登録事務所に提出することだけは出来たが、嫌がらせはまだまだ続きそう。

7月だけで4回も登録事務所に足を運んだ代表メンバー。7月28日のVVK定例ミーティングでも登録状況を報告し、8月も継続して団体登録を目指すと宣言したオバチャンたち。8月2日には代表メンバーで作戦会議を開き、どうやって登録を認めてもらうか話し合う予定。

7月、6月の新SHGのVVKの加盟に向けての働きかけの効果が現れはじめ、7月末にはVVK加盟SHGが16に！来年3月末までにVVK加盟グループを40にする、という目標に一步一步近づいている。

普段は10から15人くらいしか参加しない毎月28日のVVK定例ミーティング。7月28日のミーティングには、なんと50人近くが参加。新しくVVKに加盟したSHGのメンバーが、定例ミーティングやVVK事務所を見学に来た、というもの。10時から11時のミーティング開始時間に、次々とオバチャンたちが「ここがVVKの事務所かね？」とやって来る新しいメンバーたちの姿に、VVK代表のビジャラクシュミや他の代表メンバーはとっても嬉しそう。

この1か月間、団体登録のために気力&体力を消耗していただけにその喜びはとても大きい。

ビジャラクシュミ:「プロマネ！見てよ、見てよ、こんなにたくさんの方がVVK に来てくれて、アタシは嬉しいわ！」

プロマネ:「ワタシも嬉しいわ！これもアンタたちの努力の成果よね！」

ここで、2人は喜びの笑顔でお互いの腕をブンブンと振り合いながら握手。

この日のミーティングには、ソムニードの高山事務局の高田尚子さんが、ソムニード「クラフト素材ビジネス」を、VVKオバチャンに提案。

高田さんのプレゼン中、ビジネスの実施フローの部分ではボートとしていたオバチャンたちだが、年間の利益試算の話になった途端、目を輝かせて。。。 (まあ全く、なんてわかりやすいのでしょうねえ。)

さてさて、オバチャンたちは、新たなビジネス・チャンスを理解し、活用してゆくことができるか？
団体登録は？

規模が大きくなったVVKの新たな運営は？

銀行業スタート準備は？

新たなグループへの研修は？

生産・物流センターの活用は？

まだまだ色々ハードルはあるのだけど。。。VVKのオバチャンたちは気づいていないかもしれないが、新しくVVKに加盟して、“自分たちのグループを自分たちで運営してゆこう”と決めたこと自体が、もう今までの「施しを待っているオバチャンたち」ではないのだ。

登録事務所にはソムニードのスタッフの誰も付き添って行っていない。だから上の登録事務所や都市計画部の担当官とのやり取りは、後からビジャラクシュミ他、VVKのオバチャンたちから聞いたものだ。

ビジャラクシュミもそのほかの代表メンバーのオバチャンたちも気づいていないと思うけど、彼女たちが私たちに登録事務所での話をしてくれる顔は、自分たちで自分の運命を決めるという意志を持って、しかも1人じゃないんだ、VVKという仲間と一緒にんだ、という自信を持って「闘う顔」だった。彼女たちの顔は、2年前と全く違う。
